大泉高校新聞

【発行所】
東京都練馬区
東大泉5-3-1
都立大泉高等
学校生徒会
新聞小委員会
電（924）0318
〔発行責任者〕
2－1 藤木彰敏

昭和六十三年度前期 執行部役員決まる

去る六月一日、前期役員選出のための、立候補者立会演説会及び役票が行われた。しかし例年のごとく「うるさい」選挙で、また会計監査委員が決まらないなど、立候補者選出の問題もあった。

去る六月一日、前期執行部選出のための立合演説会、及び、即日投票が行われた。結果は次の通りである。

会長候補
藤木　彰敏　55％　当選
高井　啓秀　37％　落選

副会長候補
両角　竹臣　82％　信任

会計候補
福薗　輝　76％　信任
前田　啓子　77％　信任

無任所候補
伊波　里子　83％　信任
鎌田利夏子　75％　信任
壺　太郎　78％　信任
田中　貴　73％　信任

まず今回の選挙の第一の特徴は、一年半ぶりの「競争選挙」だということである。このため、ただの信任よりも自分達で選んだ会長の方が、選ぶ側にとっては、より生徒会に参加している意識が高くなり、又、選ばれた方には責任感と意欲が増すであろう。又もう一つの特徴として高い信任率があげられるだろう。大泉の選挙では当確の信任率は60％以上となっているのだが、今回は全候補が70％以上という高さで信任されている。（前回の選挙での70％以上は半数に満たない）この中には前回からの引きつぎが五名おり前回の執行への信頼が高いことを表している。けれどもこの裏には、定員割れによる再選挙を恐れた、したたかな面も無いとはいえないのではないか。

今回の選挙を少し離れたところから見ると、初めからしっくりといっていなかった。忘れた、あるいは知らなかった人が大多数だと思うが、この選挙は予定よりも一ヶ月も遅れているのである。この間選挙はなにをしていたのか、と言いたいところだが、この原因は我々の方にあるのではないか。少し生徒会というものを見なおした方がよいのではないか。

記者の感想として気にかかるのは当日の立候補者の態度である。まず演説を聞くと、どれも似たり寄ったりで個性が見られない。これは信任ということもあり、あまり真面目ぶって、反感をかって落ちるよりも、波風立てずにいれば受かってしまうという思いがあるのではなかろうか。しかしこれでは選挙の意味がなくなってしまいかねない。又応援についても同じで、この意味は、実際の人物を知らない人達にどのような人物かを伝え、推すというものだが、今回のを見るかぎりただの付き添いのように思えた。これならばいっそのこと、応援をやめ、もっと立候補者にしゃべらせたほうがよいのではないか、選ぶ側の態度の低下はこのような〝つまらない〟選挙にもよるということを、もう少し考えてもらいたい。

桜並木に薬剤散布

七月七日、薬剤散布が行われる予定であったが、生徒達の周知徹底が不十分だった為、七月九日に延期となった。薬剤散布の是非は様々だが、この件が突然、生徒の了解なしに行われることは、問題があると思われる。生徒も学校の一員であるから、このような大切な問題に生徒もかかわるべきと思った。

会計監査委員 9月に選挙

右記の記事の補足となるが、会計監査委員及び、会計一名の再選挙が九月に行われることが、選挙管理委員長の話であきらかになった。

これは、六十三年度前期の役員選挙のさいに、欠員を生したため、役員選挙細則第二十六条に基づき行うものである。

また、会計監査委員は、生徒会規約上、五月に改選されなければならなかった、また誰も決まっていないので、これからの会計業務に支障をもたすなどの理由でやらざるおえない状況もある。

しかし、六月初めに行われた選挙の再選挙を九月にやるというのは、生徒会規約に載っていないからといっても、非常識ではなかろうか。

記者は、生徒から徴収したお金をチェックする大事な役目を、早く決めて欲しいと思った。

冷水機増設される

突然今年度から外出届け出制が強化されるのと引き替えに？冷水機が三機増設されることが決まった。

今学校には五つ冷水機があるが、その衛生状態、水の出が悪いなどについても改善するようである。

ちなみに、設置場所であるが、冷水機のない四号棟に一つ、正面玄関東側の冷水機を一機増設して混雑の緩和を計るそうだ。

執行委員会のアンケート実施される

去る六月二十日、休み時間を利用して、執行委員会主催のアンケートが行われた。覚えている人も多いと思う。

さて、アンケートの内容は、外出届け出制について、行事について、体育着について、文化祭の演音祭について、冷水機について、自由論の設問だった。

今回のアンケートは、生徒の意見を取り入れたいという執行の考え方は良かったが、このアンケートの結果を執行委員会がどう扱うのかが問題である。

つまり、外出届け出制について「廃止すべき」という意見が多いからといって、必ずしも廃止するという運動を起こすとは限らない。

また別の問題として、アンケート全体が誘導尋問に近いものであるということだ。この点について先生方はかなり話し合われたそうだ。

次回は、もっと多項目のアンケートを行って欲しい。

新会長の言葉

「執行委員会の仕事て、どんなことをやるの？」

とよく聞かれます。そこで僕は、「うーんと」と考えてしまうのです。というか、自分が知っている限り、執行委員会はいままで何をやってきたのかわからなかったりします。

それは、今まで執行がしてきたことが、あまりに事務的であること、また、案はあったのに実現されなかったので、結局はやらずじまいだったということに関係します。

また、冒険の質問を聞かれるということは、それだけ執行委員会で話しあわれていることがわからないということにも関係します。

こういう悪循環が重なり、生徒会活動が衰退することになります。

そんな執行委員会のメンバーだけで興味をもち、また話し合われるのはおかしいと思うのです。

そこで、生徒会の機関誌〝コミュニケーション〟の発行を定期化（二週間に一号）して、執行委員会で話し合われていること、学校の問題、投書などを載せたいと思っています。

また、会員の意見、質問を聞くための投書箱の設置を行いたいと思っています。そして、それらの意見・質問には、それぞれ責任ある解答をしたいと思っています。

執行委員会はこのような会員の要望を聞いたり、各委員会との間を潤滑にしたり、その他学校のいろいろな問題を解決するのを手伝ったりするよろず屋的存在、会社で例えれば総務課的な存在だと思うわけです。　ということで、もし何か学校生活上で、何かいいたいこと、困ったこと、疑問に思ったことありましたら、ぜひ執行委員会、生徒委員会にお伝え下さい。

そういう一つ一つのことが生徒会を活発にさせる〝基〟なのです。そして、よりよい生徒会を作りましょう。

生徒総会行われる

去る五月二日定例生徒総会が行われた。（と言われてもそんなことがあったのかと思っている読者がほとんどではなかろうか？）

ここ数年、毎度同じのごとく今回も「うるさい」生徒総会であった。

議題は、

1六十二年度会計決算報告の承認
2委員会活動報告
・各委員会より報告
3自由討論
・ダンス体操部の分離問題について

なお、ダンス体操部の分離問題については、顧問が同じなので、試合等、合宿等で問題で、また、予算も別々だし、やっているのもまったく別なので分ける、の理由だった。

これに対して執行委員会は善処する意の発言がのべられた。そしてその後の生徒委員会にて、ダンス体操部を分けることを承認した。これで来年度より、ダンス部と体操部という別々の部になる。

何故来年度からになるのかは、顧問の先生がいない（今時期では、決められない）という理由である。

さて、今回の生徒総会は実にあっけないもので、三十分足らずぐらいで終わってしまった。理由として、議題が少なかったこと、議事進行をてきぱきやったことがあるが、その反面、今回の会は、実に儀式的なもののみにすぎなかったと思われた。

だが、生徒総会は本当にそんな場でいいのだろうか？

また今回の会で、気になる点があった。それは、体育館で整列する時、先生がならばせる行為があったことである。

生徒総会の場だけに残念だ。

スポット 「外出の現状」

最近、学校内で休み時間の無断外出が問題になっている。原則的に休み時間の外出は禁止とされているが、前から校則で届け出制という形で外出は許可されている。しかし無断外出は減っていない。休み時間に外出する理由としては飲料水、菓子等を買う、コピーをとりに行く、忘れ物をとりに家に帰る、昼食を食べる、などが上げられている。

加えて、無断で外出をする理由としては、前に述べた理由ぐらいで届ける必要はない。またそんな理由ぐらいでは外出を許可してくれないのではないか。第一面倒くさい、などが上げられている。

学校側が外出を禁止する理由としては、外出中に事故にでもあったら指導不行き届きということで学校側の責任となるからである。

去年まではそんなでもなかったが今年度から厳しくとりしまるようになったということは、昨年度の当新聞の記者席に載ったことが影響しているようだ。

多分読者は忘れていると思われるので、内容を説明すると…「違反？」という題で、外出届け出制について無知な人が多いことと、規則は有るのに指導部は黙認して、注意もしていない、と載っていた。

しかし、すぐ近くの店にジュースを買いに行くだけでいちいち届けを出していたら、やはりわずらわしい。中学生の頃は減多に外出することはなかったのに、高校では多くの外出が必要になってくる理由は中学生の頃に比べて、コピーや事務的な用で多くのことが必要であること、広い地域から生徒が集まっているので自転車などで外出がしやすくなったということなどがあげられるであろう。記者が思うに、休み時間にどうしても外出しなければならないときはあるので、それはやむを得ないと思うがやはり無断外出はすべきではないだろう。届け出制という形で外出が認められているのだからほんの少しの用事でも届けを出せば何もさしつかえるものはないのである。

記者席 我が大泉高校

我々の大泉高校は、とても恵まれた学校といえるだろう。なんといっても、東京23区内の高校の中では最も校地面積が大きいのである。校庭は他校に比べると広く、テニスコートなども桜並木の横にずらりと並んでいる。ついでに言っておくと、記者が入学した当時感激したのは、四階立てで、更衣室・柔道場までもがきちんとそろった体育館だった。とにかくこのように、体育活動を活発に行うことが可能なのだ。

自転車置場は、ぎっしりになってはしまうが、他校に比べれば広いほうだ。そして、比較的新しい校舎が四号棟までもある。何もかもが広々としていて、落ちくことのできる学校といえよう。

さて、このようなすばらしい学校に毎日通学している我我自身はどうであろう。と言えば、やはり、校内の雰囲気は和やかであり、だれもが親しみを感じているのではないだろうか。教師と生徒・先輩と後輩というつながりも和やかである。あまり和やかと言うと無気力というように聞こえるかもしれないが、それはちがう。部活動では思いっきり汗を流し、授業になればそちらに集中する・体育祭などの行事はさかんに行われる、そんな学校だ。もちろん、いいことづくめというわけではない。盗難などという事件もしばしば起こった。しかし、そういう悪い面よりも、すばらしい面の方が圧倒的に多いはずだ。

我々はこれから、大泉高をますますすばらしい学校にしていかなければならない。一人一人がその義務をおっている。つまり、すばらしい面の多い我が大泉高校を全員の力でもっとよくしてしまうのだ。

この恵まれた環境を十分生かして、また、その環境に負けないぐらい誇ることのできる高校にしようではないか。

路標

新学期になり三カ月が過ぎ去った。一年生が楽しみにしている臨海学校まであと少しである。大泉高校にも高校三年間のうち、宿泊を伴う、一学年全員が参加する旅行が二つある。臨海学校と修学旅行に代わるHR合宿である。ここでは臨海学校について話をしよう。▽昔、大泉高校には、「プールのない時代」があった。四年ほど前まで続いていたのである。もちろん以前にも臨海学校はあった。生徒はどこで水泳訓練を行ったのか、疑問に思うだろう。実は、毎年期末試験終了後の試験休みを利用して、石神井高校のプールを借り、四日間くらい班分けを兼ねた水泳訓練をしていたのである。他校のプールに泳ぎに行く、何か寂しい感じがするが、それはさておき、ここで誰もがもうすぐ臨海なんだなあ、という感覚をもったのではなかったろうか。▽現在は環境設備もよく整い、恵まれた高校生活を送っているのである。今年も多分例年どうり授業でも水泳があり、また試験休みも水泳の訓練があると思うが、一年生の読者はがんばってくれたまえ。その水泳訓練は、能力を見るためのものであり、少々きついかもしれないが、生徒へのもうすぐ臨海ですよ、というメッセージとして受け取れば良いのではないか。そして助教もその時少数ではあるが、参加するので顔を覚えておいたりして臨海の雰囲気をつかむのも良いだろう。▽プールが学校にある。ごく自然なことだが昔の学校では珍しいことであった。環境が良くなるとその状態が当然のようになってくるがいけないことである。大泉高校は美しい学校である。読書諸君、大泉高校の素晴しい環境設備を大切に保っていこうではないか。

体育祭を終わって

五月一五日は過ぎ、体育祭は終わった。

前日の天気予報では雨という予報であり、誰もが体育祭の開催を危ぶんだであろう。

マスコット・体育祭実行委員はてるてるぼうずに全ての願いをこめ、部の命令でむりやり長距離走を走らされたり、走るのがあまり得意ではないものは必死に雨乞いをしたのであった。（？）

翌朝、窓から空を見上げると、どんよりと今にも降りだしそうではないか。延期か?!

ところが神は努力してきた者に味方した。そう、雨は降らなかったのだ(ほとんど)。

マスコット・体育祭実行委員・応援団は天へ感謝し、そうでないものは落胆の色を隠せなかった。

そして気象庁は、またもや予報の的中確率を下げ、信用をも下げたのであった。

こうした中で六三年度体育祭は行われていった。

体育祭の内容・熱気などは読者たちはよく知っているはずなので、あえて書かない。

ということはなにかあると思う読者がいるだろう。そうなのである。新聞委員会は来場者のみなさんにインタビューを行ったのである。さっそくの内容を。

まず、国語の中田(なかた)先生、

「いやあ、そんな感想と言われてもねえ。でもウチの体育祭は雨に縁がありますね。これも大泉と、水に関係があるのでしかたないのでしょう。(中略)三年女子の民謡ができるかわらない（午前十時半）。カサをさしながらできる振り付けを願っています。カサ踊りなど。」

次に登山の服装で歩いている山岳部の方。

―何をなさっているんですか。

「部員の勧誘だ。」

「トレーニング。」

「人間は歩くことから始まるのだ。」

―勧誘だったんですか。

「そうなんだ。我々は女子部員が欲しい。そうすれば自然に男子部員も増えるのだ。」

―何か言いたいことは。

「クラブ対抗リレーをやめないでほしい。その抗議でもあるのだ。興味のある人はクラブハウス二十二号で待っている。君、入らないかい?」

今度は父兄の方に。

―大泉の体育祭はどうでしょう。

「応援団がまとまりがあり、統一感があっていいね。見てて気持ちがいいよ。」

お隣りの石神井高の方に。

―応援団はどうでしょう。

「全体に活気がないね。応援団は服装が派手だね。ウチなんか原始人のカッコでやってたよ。競技はまとまりがあるが熱心さがないね。石神井には石神井の良さがあるよ。」

ほかにもいろいろな人にしたのだが、字数の関係でここまでにしておく。

記者の感想としては、やはり石神井高の人が言うように、まず活気がない。多くのものはやる気が感じられない。中にはマスコットの横で野球をやっている者がいる。応援も援団だけのような感じである。

もっとひどいのは勝手に校舎に入り教室で遊んでいるものがいたことである。本当に情けなくなってしまう。

個人としての注文だが、ちょっと浮いている応援団を削減すべきではないだろうか。

体育祭は応援団がやっているのではない。生徒たちがやっていき、応援も生徒たちがするものである。生徒達の前に多く人数がいれば競技が見えないではないか。そしてあの練習ははっきりいってうるさい。

生徒の方も熱気がないのには困る。

大泉の体育祭は改善すべき点が多いようである。

えんだんとますこつと

体育祭といえばやはり応援団である。（これはあくまで記者個人の考えである。）そこでこの応援団について少し書くことにする。

まず、結果から見ていくと優勝は青、二位は白、三位は赤、となっている。青団は優勝しただけあって演技がキビキビとしていてまとまりがあった。また、吹奏部の応援もあったようで一層盛り上がっていた。

女子のコスチュームは、ブルーとイエローを基調としたもので、特に帽子が印象的であった。また個人的な話になるが、記者はその帽子がほしく、いろいろと作り方を聞きまわってしまった。

二位の白団はというと、ペアダンスがなかなかよかったように思う。やはりこれは、ペアの中にカップルが多かったせいでもあるのかもしれない。また、女子のコスチュームと学ランの色があっていてよかった。このコスチュームは少しおとなしいデザインではあったが、かわいらしさがあった。

赤団は応援合戦でのハシゴの失敗が残念だった。

女子のコスチュームは、少し古い感じがしたが、ダンスのかわいらしさとマッチしていたと思う。

さて、大泉高校、体育祭の名物の一つマスコットについて書こうと思う。

作っている途中のマスコットを見て、記者を含む数名は口々にこう言った。「サルの頭と胴体と足じゃん。」

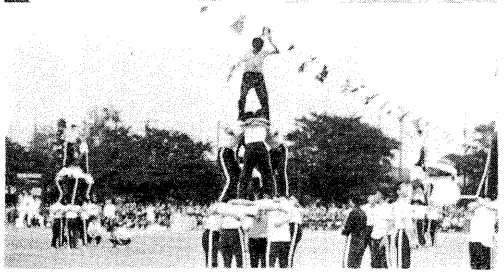
訳のわからなかったそのマスコットも体育祭当日では、その前日の委員の方たちの努力によって「良くできているなあ。」と感心してしまう物となっいた。

しかし、このマスコットを作るのには多くの苦労があったようである。大変な仕事、ゆえに〝サボリ〟や〝居てもなにもせず〟現象が起こり、とうとう「やる気が無いのならくるな」と、言った所もあるそうだ。

それはさておき、勝敗のほうはどうなったかというと、一位がバカボンのパパを作った白組、次に、ぬけ作先生を作った赤組、そして、キョンシーの青組、という具合になっていた。バカボンのパパは、歯を立体的にするために、ハリ金を使うなどをして、最後の最後までがんばった成果がでたようである。その反対に、でき上がっていない時点での優償候補と思われたキョンシーは、最後のつめが甘かったのではないだろうか。

マスコットを一生懸命作ってくれた皆さん、御苦労様でした。

吹奏楽部の体育祭



影で体育祭を盛り立てていた吹奏楽部にスポットを当ててみよう。行進曲について指揮者は―テンポが不安定で悪かった―とのことだが、歯切れのいい、良い演奏だったと記者は思う。ただ音量の不足が残念であった。青組援団の手伝いは大変頼もしかったが、赤・白のハチマキをしめた人がいたのはどうしたわけか…？　とにかく、砂にまみれての演奏、御苦労様でした。

沖ノ鳥島について

北緯二〇度、日本の最南端の島、沖ノ鳥島で現在日本の経済水域四十万平方ｋｍを守るために、多額の費用をかけた工事が行われている。

このニュースが耳に入るまで私は、沖ノ鳥島はもっと大きな〝島〟であると思っていたが、沖ノ鳥島は、ただの小さな〝岩〟であった。

沖ノ鳥島は、さんご礁で囲まれた、二つの岩からできている。大きい方が北露岩、小さい方が東露岩である。この二つの岩は浸食されて、北露岩は畳三枚分、東露岩は畳一枚分になってしまっており、しかも満潮時には、岩が海面から七十ｃｍしか出ていないのである。

領海条約では、島が満潮時に水没しないことが条件となっているので、沖ノ鳥島がもつの重さが三・五ｔ）八千九百五十個を二つの岩の周囲に円形に積みあげて、堤防を築き近い将来、この堤防の内側を特殊なコンクリートで固めてしまおうというものである。

日本がこれほどまでに、沖ノ鳥島を守ろうとする要因は、沖ノ鳥島周辺の経済水域が失しも、このまま浸食を続けたら、日本の領土と見なされなくなってしまう。ただでさえこの小さな岩が日本の領土とされていることに強引さを感じるのに、これから先のことを考えると、とても不安だ。

建設省がすすめている工事は、鉄製の消波ブロック（一なわれてしまうということの他に、五月下旬にきめられた、サケ・マス漁の母船式漁獲割当量が、米の二百カイリ水域によって、来年には今年の⅔になってしまうということである。

沖ノ鳥島についての海外からのクレームは、今年の一月に米国の学者が疑問を投げかけただけだが、島の定義は、満潮時に島が水没しないことと、人がその島に住めるということであるので、後者を全く満たしてない沖ノ鳥島はどうなってしまうのだろうか。

小さな大国、日本が、次々と領海を失なっている現状の中で、その歯止めとなるように、沖ノ鳥島の浸食よ。どうか止まって下さい！

論説　クラブの意義　II

一二九号の記者席に「クラブの意義」という題の記事が掲載されていた。

その記事では、クラブは是非やっておいたほうがよい。という趣旨であった。

今、この欄を担当している記者としては、同じ意見である、が、そのことについて注意したいことがある。

授業がおわり、そして清掃になるが、一部の人たちは、「クラブなのでやっといて。」とか、

「てきとーでいいよ。」

などと言って、すぐに活動場所へ行ってしまう。

また、

委員会を決めるとき、わざとある委員会に入り、その委員会が一生懸命にがっばって、いるのに、その間、出席しないで、自分のことをゆらゆらと行っているのである。

その委員会の人たちは小人数で作業をやり、とても大変であったと語っていた。

また、勉強の成績が悪いというのをクラブのせいにする者もいる。

クラブに入るか、入らないかは自分で決めて、勉強と両立させようと誓って入部したはずである。それならば両立は絶対のものであるはずである。

清掃や委員会や係なども、学校生活を送るうえで必要なものである。それをやらないでクラブの方へいくとは、言語道断である。まじめにやっている人たちに何と言えるだろうか。そのような人たちがいるからこそ、円滑に運営されているのである。これは、ただ単にさぼるという人にもいえることである。

このようなことはクラブの上級生に問題がありそうである。

下級生は上級生より速く活動場所に着いて、準備をすすめなければいけない。

遅れると、いろいろ上級生たちからあまり気持ちよくない事を言われるようである。

これでは時間のかかる清掃など行っているひまはないのであろう。

クラブ自体の中にも、何というか、口では言えないような雰囲気があってそれを許さないのである。はっきり言えばそれに縛られているという感じがある。

具体的に活動開始時刻を三時半ぐらいにした方がよいと思うがウチの学校は定時制があるのでそうはいかない。実に困った問題ではあるが、しばらくはそういう理由で遅れたりすることに目をつぶっていてほしい。

そうでなくては生徒会の活動が目茶苦茶になってしまう。

クラブの活動もストップしてしまうかしれない。

そういうと委員会と部にしてしまえという意見はあるかもしれないが、そういうことにすると、委員会には人は集まってこなくなってしまう。

実際、この新聞委員会も、クラブとか何とかいってほとんどの人がでてこないのが実状である。

また、もし部活動をするなら運動系という人はほとんど敬遠であろう。兼部というのは難しい

従って委員会はこのまま残すというのがベターであろう。

現在の状態は何か。クラブのために学校へ来ているという感じがふっきれない。

クラブ（特に運動系）に加入している人たちはクラブに支配されているというイメージさえでてくる。

ところで、クラブに入っている者か、入っていない者をあまりよくない言い方をしているというのを耳にしたことがある。べつに入っているかといって、いとも何ともない。

入るか入らないかは個人の選択であって、他人とは関係のないことなのである。絶対にそんなことは言ってはいけない。

こういってくると、まるでクラブが悪物及いしているように書いていると思われる読者もいるだろうが、冒頭に書いたように、入ることは別に悪いことではない。いや、いいことといっているのである。それで、あえていままでのようなことを書いたのである。

一生の中で短い高校生活の三年間を、ただ勉強というのでは、あまりにも味気ない。

あとで大きな悔いが残るであろう。

クラブに入ると、今まで知らなかった人との関係が生まれ、友達の輪は広がっていく。

そして、一つの目標への努力は、決してムダになることはなく、これからの人生に大きな支えとなってゆくであろう。そこで生まれた友情も長く続いてゆくであろう。

だから記者はクラブを勧める。

だが、それが、ほかの人たちの犠牲の上に成り立つということで成り立つ、ということになってほしくないと願うのである。

オゾンが消えていく…

―なぜ、今、フロンガスがだめなのか―

成層圏にあるオゾンを、地表に持ってきたら、どのくらいになるだろうか。わずか2～5ミリメートルの厚さにしかならないのだ。

この微量のオゾン層を、私達が日頃使っているヘアスプレーや、殺虫剤の中に含まれるフロンガスが破壊するというのだ。

なぜ、今、フロンガスがだめなのか――。

大気中に出されたフロンガスは、数年かかって上空へと昇っていく。そして、成層圏に達すると強い紫外線によって塩素やフッ素などの分子に分解されてしまう。このうち、問題となるのが塩素（Cl）だ。塩素はオゾンと反応してオゾンを酸素分子に変え、自らは酸素原子一個と結びついてClOという分子になる。このClOは次に周りの酸素原子（O）と反応して、酸素分子（O_2）とClになる。このClはふたたびオゾンと反応してオゾンを分解する。つまりCl自身は消滅することなく、オゾンと何度でも反応して、永遠にオゾンを破壊し続けるのだ。

地球が病めば、人間自身も病むことになるだろう。

オゾンは、私達を守ってくれている。私達は便利性を取るか、安全性を取るか、決断する時が来たようだ。

コンパ …その是非について…
本紙記者と学校側の考え

コンパ――小学館の新選国語辞典によると、「学生などが、会費を出しあって行う懇親会。」とある（ちなみに、我が家には広辞宛なる不経済きわまる代物はない）。いかにもあっさりと書れているが、今回、特集として取り上げようというのが、これである。

大泉高校では、原則としてコンパは禁止されている。というのも、教師達の頭に、コンパ＝飲酒（イコール）、喫煙、という方程式が成り立っているからであり、まあ、事実そうなっていることは大部分の生徒は知っているだろう。

以下に挙げるのは記者が耳にしたその実例である。

――K駅北口のお好み焼屋で某部の三年生追い出しコンパ（通称追コン）を聞く。レシートによると、ウイスキー二本、ビールその他十数杯と出た（らしい）。もっともウイスキーはほとんどOBと一部生徒だけで飲んでいたそうな。

――I駅の居酒屋でクラスコンパ。カラオケがでて、大変にぎわう。こうなると大人も高校生もほとんど変わらない。当然ながら、酔っぱらう人も二・三人出て、結構帰るのが大変であった。

さて、今回はこのような状況を踏まえ、対照的な二人の主力記者（メインライター）による論説を載せてある。この特集が、現在のおざなりなコンパ対策に一石を投じられれば、幸いである。

コンパの在り方

まず一番始めにおことわりしておくが、校外でのコンパを禁止していることは、必ずしも法律的な束縛にはなっていないことはもちろんである。仮にもし、法律で禁止すればこれは問題ごとである。つまり自由に会合できないということである。

だからといっては何だが、学校側がコンパを禁止するのはおかしいと思われる。

また学校が、仮にそういう規則を決めていても、その規則が校外まで通用するのだろうか。いやそんなことはないだろう。第一、コンパを監視するとすれば、それは自由の剝奪にもなりかねない。

ところで、何故コンパを禁止しているのかとなると、理由として、酒、煙草が、コンパの会合に入ってしまうことを学校が考えているからである。（と思われる。）

とすると、この先の領域は生徒の自主判断に任せることになるとおもう。

つまり、コンパをやるのには、特に問題はないと思うのだが、そこで、酒、煙草が入ると問題になるのだが、そこは、生徒一人一人の個人の理性の問題ではないか。

だから、もし理性、認識力しっかりしてれば、コンパの問題をとり上げた価値がない。なのに取り上げたのは、実際にコンパについて両者とも考えてもらいたい問題があると思うからだ。

生徒側の問題点として。コンパの席上で酒を飲んだり煙草を扱ったりすることである。

はっきり言って、両方とも法律違反である。加えて言うに、煙草は絶対にいけないと思う。体に毒であることは周知の事実だし、コンパの席上だからといって容認すべきではないだろう。また、会の運営方法しだいで、酒、煙草をなくすこともできるだろう。

先生側の問題点として。校外でのコンパを禁止している主旨のビラを配る。

この点は、父兄の方々が、学校はコンパに対してどのような態度をとっているのか問われたためだろうか、何も学校が校外のコンパを禁止することはないと思う。

コンパとは、数少ない、人間交流の一手段として、今後とも行われるだろう。

今回の特集は例の、コンペ（それはゴルフ）じゃなくてカンパ（おいおい、アブねーな）、とも違って、コンマ（は句読点でしょ）でもなくて、あ、そうそう、コンパについてである。（毎度毎度のくだらないリードだこと）。

実を言うと、この企画は当の記者が出したのだが、はっきり言って、バケツ、もとい墓穴を掘ったのでないが、と思っている。何せ身に覚えがありすぎる。たたけばホコリで山をつくってしまうほど、ホコリが出る。記者は物事を断らない（というか、断れない）タイプなので、コンパを開く、となると、たいてい顔を出しているのである。

記者その二の意見

さて、甘い考えの持ち主の先生方でも、大泉高生が校外コンパを全く開いていない、などとは、さすがに思っている。コンパが禁止されているのはそのためである。

高校生は、まだ大人ではないので、そういう様にハメをはずしやすい。だから、その禁止しているのである。

何故、学校側はコンパを禁止しているのでしょうか。

それは、行事の前に保護者あてのプリントを配ったものに全てが書いてありますが、それを説明しますと、学校側は各種活動の反省会という形で、上級生や、OBが下級生を含めて会をもつことは、それなりに意味のあることと考えられます。（必要性は認めている）またそのため、校内で七時までコンパを行うことを認めています。（七時まで認めているといっても、父兄から「学校はなぜ取り締まらないのか」といった抗議の電話がかかってくるそうだ）またそれで十分だと考えています。コンパが校外で行われる場合、現実には、喫煙、飲酒が広範囲にわたって行われています。またそのような例はOBなど上級生が無理矢理飲ませるムードがあり、それに集団心理も手伝い、暴走した行為になった実例は今迄にあったことです。

よって学校としては、飲酒、喫煙があったときは厳しい指導をしていきます。

指導部長さんにインタビュー

今回コンパの記事を載せるにあたり、生徒側の意見だけでなく、学校側の考えも載せたほうがいいと判断したため、指導部長の清水先生にコンパについて、今話題の外出届け出制についても聞くことにした。

。外出についての学校の姿勢はどうなっているのか。

学校は教育空間です。家でお菓子を食べるような日常性を一人一人の甘えで持ち込まれたら、教育活動なんて成りたちません。全校生徒がうちに居るような気持ているとどうなるでしょうか。だから、外出によるあまえた気分を持ち込む事を心配するのです。

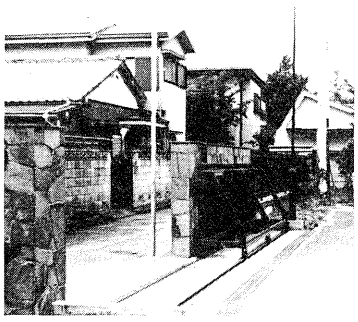
また外出を全くの自由にした場合、もし事故が起こったら、生徒の不注意だったではすまされないのです。西門の前の店は事故なんか起こらないじゃないかと思いますが、そうすると、そのような店から持ち込まれてくるゴミの量がかなりの量になります。そのゴミを処理するのにかなりのお金がかかるのです。

といった主旨のことを話されました。これからは自分だけでなく、学校の立場からも考えてはみてはいかが？

あの記事から学校はどうなったのか
――外出届け出制を考えて見よう――

突然三面に外出の記事が載っているのを見て、一面にも外出について載っているのに何故、三面にも載っているのかと不思議に思う読者がいるかもしれない。

理由は、この外出届け出制が、俗にいう校則問題にかかわってくるという重大な問題であること、また一面の記事には、外出届け出制を容認し、利用を呼びかけている文であるが、そんなことでは、この問題を解決できないと判断したため、と、記者は前回の新聞で、問題の記者席を担当したため、書いた方がいいのではないかと、いう理由だからである。



さて本題に話を移すとする。

そもそも今年度から外出届け出制を強化しはじめたのは、前回の記者席の欄の「（規則があるのに）指導部はまったく注意をしようとすらしない」という部分に誘発されてしまったからである。

記者として、あの記事での主旨は、特に取り締まらせたかったのではなく、事実生徒手帳に、生徒の心得として、いや校則として載っていることを知ってもらい、この外出届け出制という規則の危険性について理解してもらい、必要とあらば、生徒の方で改善運動をおこすべきだといいたかったのだった。

だが現実として、無断で外出している人は多く、また、そんなに多く外出しているのならば、規則改正運動をおこせばいいのだが、まったくそのような素振りは見ることができない。

だが、外出届け出制をとっていながら、事実上外出を禁止している学校の立場として、「外出している時に交通事故でもおきたら、全く学校の責任となってしまう。」と、「学校は教育をする場であってジュースや、アイスクリームなどを食べにいく筋合いはない。少し我慢して、放課後になってから飲んだり、食べたりすればいいのではないか。」という考えがあると思われる。

確かに、それはそれで正論だと思われるが、後ろのような意見があるとすれば、その意見は、先生方の美意識の問題につながるだろうと思う。

さて、生徒の心得とはいったい誰がいつ決めたのであろうか定かではない。そんなわからない校則を守っていく事はないのではなかろうか。

そこでもう一度、先生と生徒の手で新しい校則を作る運動をおこすべきだといいたい。

時代に合わなくなった規則を改正するのは当然のことだと思われるのだが、改正の件に関してはまったく触れていない。いったいこれはどういうことなのだろうか？

といろいろ書かせてもらったのは、どうしても生徒一人一人にこの問題、外出届け出制を含めた校則問題を考えてもらいたかったからである。

ともかく、この外出届け出制をはっきりしたいものだ。

他校訪問
国学院久我山高等学校

今回は、井の頭線久我山駅から歩いて二十分程の、玉川上水前にある「国学院久我山高等学校」を訪問した。

正門をくぐると、校庭で野球部とサッカー部が練習をしていた。久我山というとスポーツがさかんなので校庭は広大なものであろうと考えていたのだが、予想に反して割と小さかった。

事務室で新聞部の人と会い、会議室に案内されてインタビューを開始。まずは特色についてたずねてみた。やはり、運動部が強くてさかんということである。まずは、ラグビー部。

幾度も花園へ行き、優勝経験もある名門である。去年は惜しくも東京予選決勝で、大東文化大一校に敗れてしまった。

野球部も亦、甲子園に出場した事のある名門部である。

最近では、男子バスケットボール部が全国選抜優勝大会に出場した。又、ワンダーフォーゲル部出身の方がチョモランマ（エベレストのこと。言わずと知れた世界で一番高い山）に登ったそうである。

次は行事に就いて尋ねてみた。先ず、九月に文化祭。何と昨年はあのイトウセイコウさん（！）を招いたと言う。

何故かコンサートは禁止、なんだそうだ。

インタビューを終えて、新聞部の方々に校内を案内された。

プールは無いが、食堂は我が校よりも大変広く、設備も整っていた。校舎は割と綺麗で、併設の中学校とは繋がっていない。少し離れた所には付属幼稚園もあるとの事。

そして、男女共学であるのだが、校舎は別。校則で髪の長い女子は三編み。校則そのものは「並より上」とのことだった

学園生活ではテストが年四回。漢字テストとなると毎月あり、そのせいか、進学状況は良い。付属中学から高校に入るには進学試験を受けなければならないが、殆んど全員進学する。生徒総数は約二千人、男子が多い。制服は「イヤ」なのだそうだ。男子は歴史があって今年四十四周年。昭和二十七年に男女合併した。

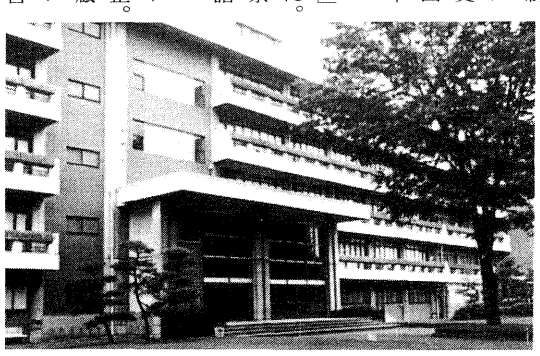
何だか「学園生活」から離れてしまった。

久我山祭（文化祭の名前）では英会話部が英語劇を上演。前述したコンサートの他、模擬店も禁止。

体育祭は昔は武蔵野競技場でやっていたそうだが、今は自前（つまり、校庭ということだ）。オリジナルの久我山音頭を女子が踊り、とても盛り上がる。

修学旅行は我々と同じ広島。戦争の悲惨さを知る上で良い事だが、日本は加害者だった事も忘れてはならない。

最後に久我山高の新聞部の皆さん、御協力有難うございました。紙上を借りて厚く御礼申し上げます。



文芸欄

佐野元春 with ハートランド

「佐野元春？うーん。嫌いじゃないけれどね。でも…。」

という返事が返ってくる。

確かに今の高校生はあまり彼の曲を聞かないであろう。

だが某FM雑誌のアンケート調査で、彼は好きなアーチストの二十二歳以上の部門（投票者）の中で日本人としては一位なのである。

だからけっして嫌われているわけではないのである。

つい最近、初のライブアルバム「ハートランド」を発表したが、元春を知っている人、知らない人も是非聞いてほしい。とっくに解散したグループのものとはスケールが違う。

このアルバムには彼の今までの七年間の活動、いやそれ以前からの集大成なのである。

八〇年に「アンジュリーナ」でデビューしてから八六年の「カフェ・ボヘミア」までの。

この「ハートランド」を聞いて彼に興味をもったという人にお勧めしたいアルバムは、全部と言いたいが、彼の特徴が表われている「サムデイ」と「ビジターズ」である。

「サムデイ」のころには元春のバックバンド、ハートランドに伊藤銀次もおり、八〇年代前の絶好調という時期であり、かの有名な「サムデイ」が収録されている。

「ビジターズ」は彼が八三年から八四年にかけてニューヨークに滞在した間の混純と模索が入り混じあった作品であり、ラップ感覚の曲も何曲かあって、四年たった現在でもぜんぜん新鮮さを失っておらず驚かされる。

これからも時代の最先端をゆく彼に注目してもらいたい。

〝葡萄（ぶどう）が目にしみる〟—林 真理子—

最近読書から遠ざかっていた記者は、何を読もうかと、本屋の新刊書をのぞいた。

今の心境から、気楽に読めるものがよい。そして手にしたのが林真理子の「葡萄が目にしみる」である。

若い世代を代表する作家、林真理子の独特な風ぼうを思い出しながら、何となくおもしろそうな小説に思えたからだ。

それでは、内容を紹介しよう。一言でいえば、地方高校の生徒たちの日常生活を書いた、単なる青春小説である。あこがれの共学の高校へ入学した主人公の乃理子が、先輩に恋をし、破れ、キズつく。そこで、勉強に励み、東京の大学に入学、成功への道を歩んでいくというハッピーな物語の中に、ラグビーの天才、岩永をめぐっての少女たちの微妙な心の動き、悩み、苦しみをおり込んだ、どこにでもある話ある。

しかし、この小説には、読者を引き込んで行く何かがあることを見逃してはならない。それは、登場するすべての人物の性格・描写のすばらしさと、表現の細やかさであり、また、岩永をめぐって、主人公の乃理子と、乃理子の友人の少女たちが、それぞれ違う立場から「女」をみごとに演じているところである。

主人公の乃理子の人物描写においては、作者、林真理子の自意識が乗り移って、全面的に読者の前に展開されているので、特におもしろい。

記者は、主人公がブスであること、「メスカバちゃん」というあだ名をつけられるほど、動作や反応の鈍い少女であることに興味をいだきながら、美人の主人公であったら、さぞつまらない小説になっていただろうと思うのだ。

最後は、乃理子のあこがれと羨望（せん）的であった美人の友人たちをさしおいて、東京で岩永と再会する場面となるのだが、記者は、ここに作者の誇りというものを感じて、痛快感を味わったのである。

青春時代を生きる諸君に、勉強に疲れた時、むずがかしい本を読んだあとに、一息入れるつもりで、気軽に読める本の一冊として、紹介する。

角川文庫　¥三四〇

「詩」と仲良くなろう

観ること、聴くこと、読むことは結構好きなのに、書くこととなるとどうも……。という人は多いのではないだろうか。記者はというと、こうして新小で記事を書いているのだから嫌いではない。しかし、決められた字数の中で自分の思うことを率直に書け、ということになると、思った文が書けなくなる。

そこで記者が実行し、読者にも勧めたいのが、「詩」である。「詩」といっても、難しく考える必要はない。ただ自分の思っていることを、ポツンポツンと、言葉に変え、それを書き留めればいいのである。今、記者は「ただ」という言葉を使ったが、これはただごとではない、なんて思った君は、大まちがい。自分の思っている本当のことばかり書く必要はないのだから。おまけに、字数制限も、〆切り日も、テーマもない。自分が見せたくなければ誰にも見せなければいい。嘘でも、理想でも、人とのことでもいい。とにかく、一言、二言でいいから、書いてみよう。いつか書くことが楽しみになり、自分だけの詩集が生れるはずだ。そこにイラストを入れたりするのも一案である。

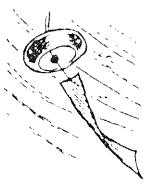
ここで記者の友人Nさんが勧めてくれ、記者も気に入っている、銀色夏生（ぎんいろなつお）の詩集を紹介しよう。

銀色夏生は詩人であるが写真家とも言えよう。彼の詩集を聞けば一目でそれがわかる。どのページも、センスの良い写真がまるで彼の詩の一部である様に存在しているのだ。

「これもすべて同じ一日」「わかりやすい恋」「LESSON」（角川文庫）。何編が記者の気に入っているものも紹介したいと思うのだが、字数の関係上無理なので興味をもった人は是非、一冊手にとって欲しい。

私達は迷わずに歩いてゆきましょう。もう、ここまで来てしまいました。月日は、すぎていきます。あの頃に帰りたいなんて言わないで下さい。今、目の前にいるのが私です。今、目の前にいるのがあなたです。笑えることが素敵です。

—「LESSON」冒頭より



アイドルデビュー

今回は歌手のデビュー曲を紹介したいと思う。

「スニーカーぶるーす」　近藤真彦　〝たのきんトリオ〟で人気者になり、新人のオリコン初登場1位という記録をつくった。

「仮面舞踏会」　少年隊　少年隊はデビュー曲が三枚もある。ジャケットとB面曲が異なる3種類のデビューレコードを同時発売した。

「裸足の季節」　松田聖子　山口百恵が引退した年で多くの女性アイドルがデビューした。当時、この曲は大ヒットとはならず、聖子がこれほどの大スターになると思った関係者は少なかったようだ。

「としごろ」　山口百恵　14才でデビューし、デビュー当時、桜田淳子、森昌子の3人で花の中3トリオと呼ばれていた。

「暗闇でDANCE」　バービーボーイズ　オーディションをきっかけに、レコードデビューのチャンスをつかんだグループ。

「ピョン吉・ロックンロール」　とんねるず　TVアニメの主題歌としてリリースされたものが、とんねるずが人気者になった85年12月に、再発売されている。

「恥ずかしすぎて」　南野陽子　デビュー曲は、大ヒットとはいかなかったが「スケバン刑事Ⅱ」で、人気スターになった。

青春雑感

矢野一心

唯れにでも、人生に於いて少なからず影響を受けた人物が何人かいるものだ。

師との出合い、特に多感である青春時代に、どの様な師とめぐり合え、又は求めたかでその人間の生き方が大きく左右されることもある。そこで、私の青春時代に特に多くの影響を与えて下さったお二人の先生を中心に書いてみようと思う。

小さい頃から運動が得意だった私は、中学に入るとすぐ陸上部に入った。一人目の師は、その陸上部をなぜか目のかたきにしていた理科の先生である。個性が強く、授業の半分はありがたいお説経でつぶしてしまうが、大変面倒見の良い。40才近い独身の先生であった。この先生の場合は自分からとび込んでいった師といえるだろう。

最初、その強烈な個性と人柄に魅力を感じた私は、嫌われた陸上部に籍を置きながらも憶せずに先生の自宅に一人でおしかけたり、先生が顧門をしておられるハーモニカバンド部に入ったりするうちに音楽会や演劇などに連れていってもらうようになった。

音楽会に個人的に行く余裕など全くなかった当時、N響とベルリンフィルの演奏会に二晩続けておともし、そのテクニックと音質の違いに愕然とさせられたり、林りり子のフルート独奏会で、ハンガリア田園幻想曲を聞いた時などは、感動するとともに自分でも早速フルートを始め、一時は本気で音楽の道に進もうかと思ったほど夢中になったりもしたが、ともかく、沢山の得がたい経験や刺激を惜しみなく与えて下ださった。

そうこうするうち高校受験も近づき、あまり豊かでなかったわが家の経済状態を考え悩んでいたある日、先生のなにげなく言われた「矢野くんこれからの社会は工業だよ！」の一言で方向が決まり、当時発足したばかりの都立工専電気科の一期生となることになった。尊敬する先生の見通しのもとで悔いのない選択をしたと今でも思っているが、現実はそう甘いものではなかった。当時の産業界の即戦力となる技術者養成場（私にはそう思えた）といった感じの学校は、時代の要請に答えるべく、5年間で普通大学卒業単位以上の単位が科され、又登下校時にはさながら民間企業の毎く、タイムレコーダーを押し、しかも七割強の生徒が三年間無遅刻、無欠席といった異常？とも思える状態や、教科内容のかたよりにどうしても馴染めなかった私は、結局三年でとびでてしまった。

しかし、そんな学校生活の中にも今の自分を位置づけるような影響を受けた師がおられた。精力善用、自他共栄

柔道の創始者、嘉納治五郎先生のこの教えを始めて知ったのは、高校一年の時である。

鮫洲の海辺にあった木造の柔道場で、一段高い師範席から、半ば口を尖がらせながら言葉少なに、しかし熱心に嘉納先生の教えを説かれていた初老の柔道大家、この先生が二人目の師であり、いわば私の心の師である。

旦っては、都立ながら全国大会に入賞し、都では常勝の実績を持つ柔道部を育て、その一生を高校柔道の発展、育生に捧げてこられた先生の生き方と、その迫力は正に本物であり、深く言葉を交わさずとも、自然と頭の下がる思いのする先生であった。

結局5年の過程を3年でやめ、教育系大学から本当に好きだった運動のできる体育教師の道へと進む決心を心理的に支えてくれた心の師としてどうしてもあげておきたいお一人である。

なんにでも積極的に可能性を求めチャレンジした中学時代から、ある程度現実に眼ざめ、自分の意志と判断で行動がとれるようになった高校時代へと、ずい分回り道をしたようだが、常に素晴らしい師にめぐり合い、又実に様々な経験を積むことのできたわが青春に悔いなしである。

おすすめクラシック

夏の夜にぴったりの曲を紹介してみたい。

「月の光」（「ベルガマスク組曲」から）　ドビュッシー作曲

ドビュッシーはフランスの作曲家で、新しい音の響きを重視した作品を発表し、印象派の巨匠と呼ばれている。

この曲は1980年に作曲された「ベルガマスク組曲」の四つのピアノ曲中の第3番目。ベルガマスクというのは、彼がイタリアへ留学し、北イタリアのベルガモ地方に旅行した時の印象を頭に思い浮かべ、題名にしたのだといわれている。

初めは、しっとりとしていて、心の落ちつきを感じさせる。途中から、動きがつき、まるで、月が上っているかのように曲が流れてゆく。そんなうちに、いつのまにか幻想的な世界へ吸い込まれてゆくだろう。やがて、再び最初のメロディーにもどり、おちつきを取り戻す。

原曲はもちろんピアノであるわけだが、他に、オーケストラやシンセサイザーの演奏もある。シンセサイザーではピアノとはまた雰囲気が違ってくる。「月」というよりは、「宇宙」といったイメージだ。ぜひ、こちらも聞いてみてほしい。

夏のむし暑い夜、月の光の下で、すいかやかき氷などを食べながらのんびりと聞いてみるのもいいのではないか。

編集後記

今回は、主に論説調な記事ばかりになってしまい、新聞の本来の取材して報道するという記事が少なくなってしまいました。と共に今回も締め切りを大幅に過ぎてしまい、この編集後記の記事が、最後の記事となってしまいました。

ところで、三面の特集記事はいかがだったでしょうか。今後とも、別の話題で今回のような特集記事を作りたいと考えてます。（藤木）

今回もまたまた締め切りをずっと過ぎてしまい、委員長、その他の方々に大変迷惑をかけてしまいました。ところで今年のセ・リーグの優勝はぜったいドラゴンズである。巨人ではない。（T・I）

新聞小委員に加入して初めての仕事はいろいろ勉強になりました。大泉高校の現状を皆様に少しでも理解していただければ光栄とおごそかに考える今日このごろでございます。（槌田　烈伝）

今回の新聞の製作にあたりまして、写真を担当させていただきました。印刷会社の皆様、遅くなってすみませんでした。委員長がもっと早く撮影するよう指示して下されればよかったと思うのですが…。（某部第42部長）

編集後記なんていい加減なもので、現に僕が書いている時点（予定締め切り日前午後十一時）ですでに書き上げられている原稿なんか、半分もないでしょう。特に一年生の新小委員へ。締め切りは必ず絶対に、次回からは守るように。でないと私達が遅れて書けません。

それから、九月三日はドラえもんの誕生日であると同時に、僕の誕生日でもあるのです。ゴミでも病気でも不幸の手紙でも何でも受けつけています。よろしく。（N・F）